

先進繡像玉石雜誌 繢篇

一



8
9
80
1
2
3
4
5
6
7
8
9
90
1
2
3
4
5
6
7
8
9
100
1
2
3
4
5
6
7

柳菴栗原氏編

先進
繡像
玉石雜誌 三編

東都書林

知新堂發兌

先進繡像玉石雜誌續三編卷第一目錄

山本勘助晴幸真像二幀

軍配團扇

葛井寺合戰地理天時相應圖

破軍星操法

高旗霸旗

豬城 鎮兵糧料

城取

唐大興城經營細圖

安藝棚守氏

備考畠法

賀高

下妻乃多賀谷氏

周防山口風俗

上下 前九年後二年合戰乃詳

後三年合戰

武田信虎一族を滅ぼ一事

落照露

牛久保 言抄

京流劍術

鬼一法眼

神道院

先進繪像本不雜誌續篇卷第一目錄終

甲胄着初乃式
城取繩張
圖
人數備營城
百雜
亞字形
車懸
口奇口凸乃陣
須崎掘内乃記
八幡太郎義家鎧着用乃次第
右因道淮流乃城取
升形八七
海津城乃古
道鬼改凸八陣
吳子胥乃城取
陽乃矩
陰乃矩

晴信朝臣元服
武田上野今信友
所領百貫
羨黨
口陣列
孫子又事
海野平合戰
謙信信玄を論じ
上枝武田の家格
刹那
烽火法
景虎の本卦
時因陣
間牒
一座一起
足輕
潮尾合戰
周書七制
鶴翼陣
萬又子世七備
滿寵
上列陣
大益
青竹の柄采幣
晴章蘿髮
戸石合戰
緋陣
上田原合戰
龍虛
諫訪賴茂
一騎丸
知行
藍崎合戰
鷲木合戰
御一字
年始乃式

山本勘助晴幸真像

或家藏



一書不河邊大長魚名云
乃子孫ありと云へ信やく

信光館

又

關氏所藏廿四將像所載



信光え前像と左衣眼相違あり孰是あるをりらば

信光模寫

玉徳一ノ一

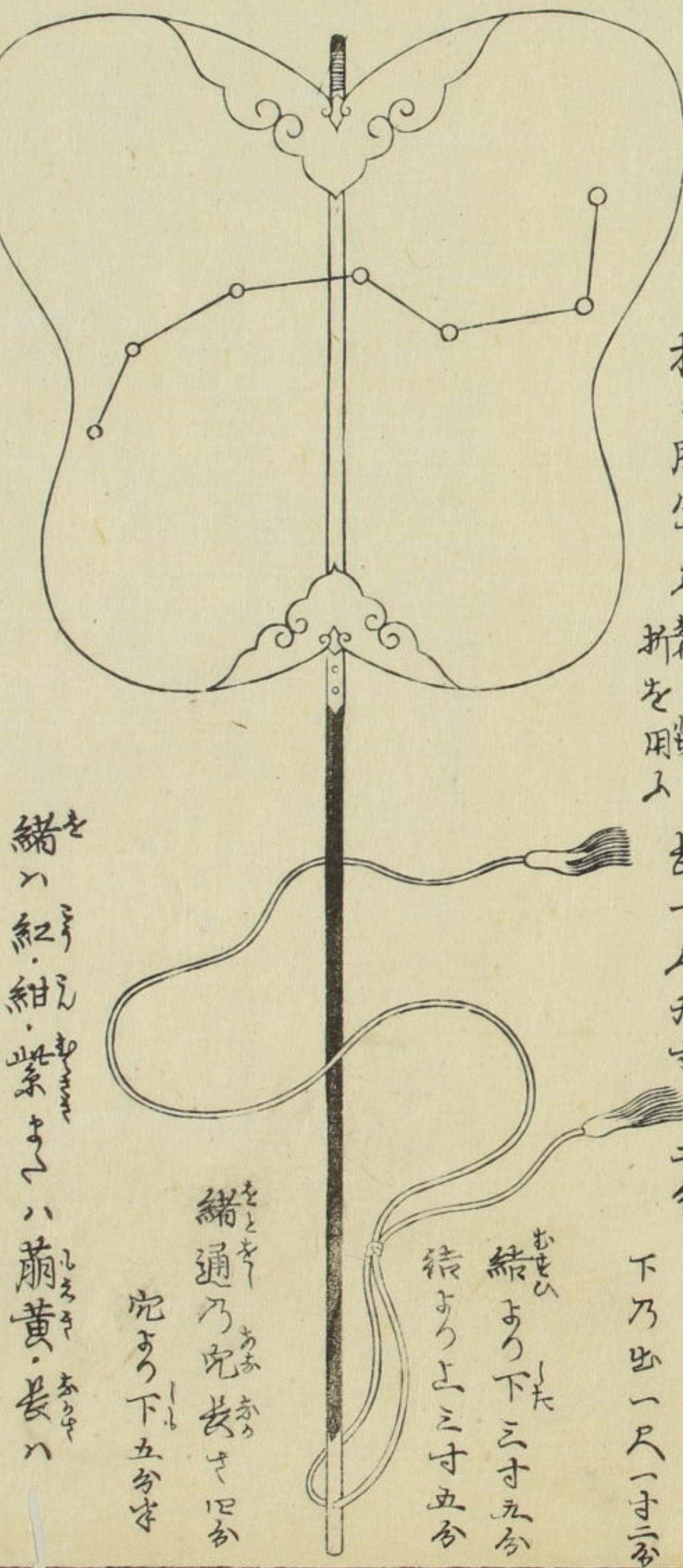
軍配團扇 山本晴幸所製

團扇立八寸 橫上ふく九寸 中ふく七寸三分 下ふく七寸二分
柄ハ勝軍本又ハ弓乃 長一尺九寸 五分 よ乃出三分
折毛用入 下乃出一尺一寸三分

緒通乃吹長さ四分
穴あり下五分半

緒
ハ紅・紺・紫・青・ハ崩黃・長ハ
團扇乃立之川毛を用ひ此うちハ
乃緒二尺八寸あり

練皮二枚合き朱漆黒漆
七星八金八口畫呈



山本勘助晴幸入道道鬼を明應二年癸丑六月六日近江國
神崎郡山本村了生号山本村ハ越知川宿乃歟近江源氏
山本九郎時綱乃末葉と云里永正十九年七月九日先々
本近江守氏綱卒く家を續へキ子承國人氏綱乃弟
吉侍者も相國寺ふ喝食乃體スく尼山を還俗せ片
せ・氏綱乃遺跡と定頼と改め京都小出仕一従に位下
老尼等り周旋了依と云とし・其家督乃初國中乃政事を極
シ叙ノ・彈正サ御小任也・其家督乃初國中乃政事を極
又江北乃佐々木京極高清入道も・上坂泰貞齋ふ軍務を擅
せ失里ノ・小淡井新之郎亮政も・上坂泰貞齋ふ軍務を討
家を進退せんとするを見テ・角弓ハ近江乃國ハ主弱く後
王賈一ノ二

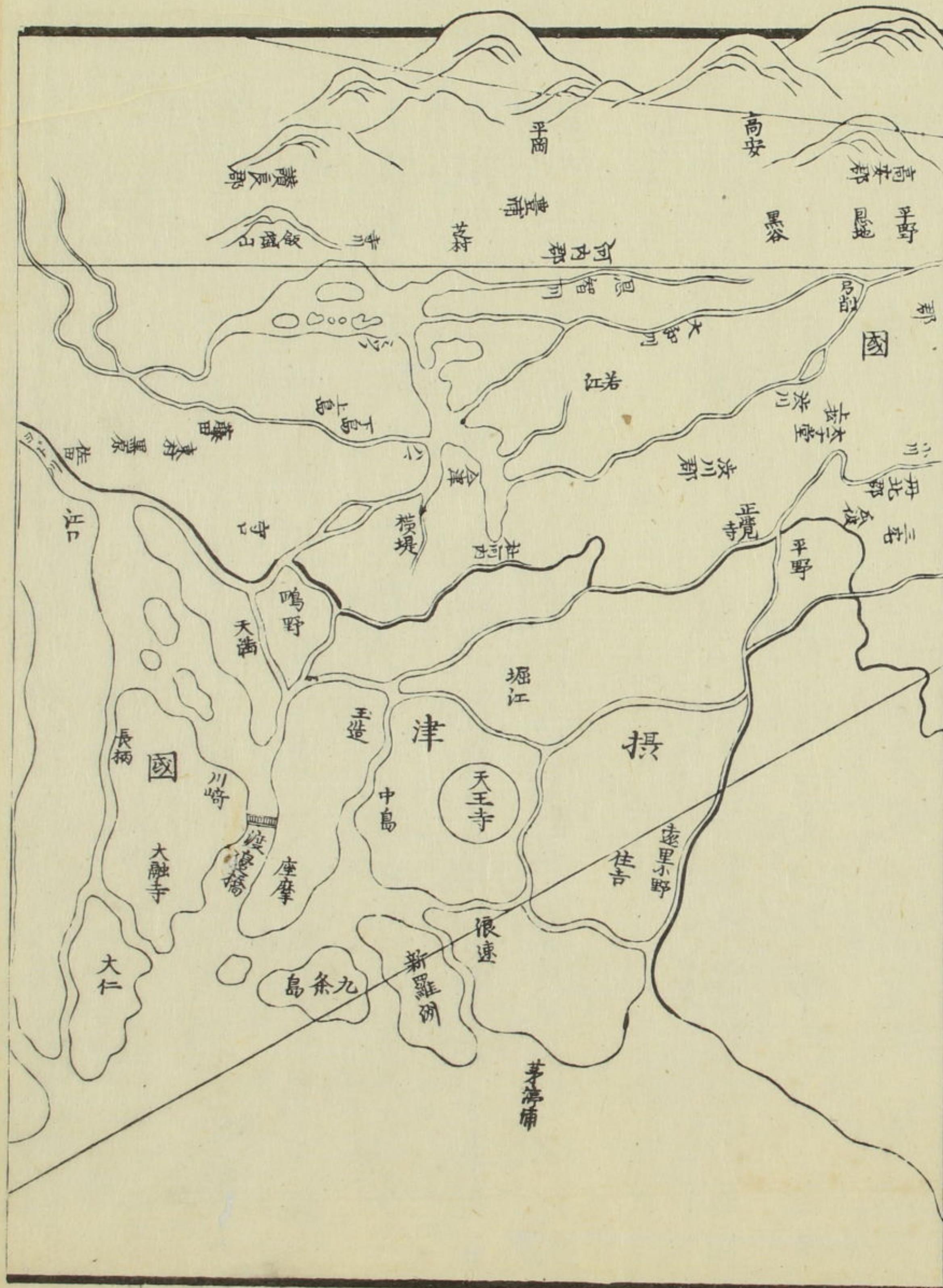
強健を取乃三ふく・弓箭前乃光輝を天下ノ露そく從乃大
將も出ずき形う・我家貧賤たりと云とモ・兵士乃藉を汚
身あ里能大將ヲ隨フ・淮公乃運を試モヤと決定シ
永正十八年九月下旬・生年廿六歳心細く少只獨近江國
を立出く・先京都小赴き・北山邊乃知己を便里・等持院の
長老ノ身を寄・將軍家乃奉云を望・薪水を給奉モ・
と老實・お里け毛は・長老の意・叶ひ・寺中乃諸務を管轄
兩三年小成ノけ里已上・山本氏系譜及ひ・山本村里人乃
然るア・將軍義植・御ち・大永元年二月七日・竊・御所を・御
出あり・泉列塚内南庄・小隱御座け・から・爰も都透く
悪う里故而して・同月十日淡路島へ移らをみ・後み

河波國板東郡撫養島ふをそく・是の管領細川政元乃家督
高國澄之澄元と名也たる里一ふ澄之へ澄元不殺さし・澄元
も高國を斃さんと數年乃合戰う退屈せず勢力入る故と
そ例乞し勘助大了望を失ひ熟思やう新將軍義晴卿へ
幼稚不在て萬事も高國管領也と云共其身驕奢ふく
弓箭乃穿鑿ふ疎し・供業を興ちく・大將乃器ふあらひ
去ハ柳營奉公乃食を翻し・智勇兼備乃良將也值遇をも
やとそ先中國を志し・寺持院乃長老の暇を請ひハ長老
其志を哀れミ馬乃贋心を盡し・生立を大臣勘助も云
年四半期・都の名殘情よきく・大内山に立續く・雙乃
岡乃松枝も今日を限と見返せハ恩人ふ少鞍馬山次第
岡乃松枝も今日を限と見返せハ恩人ふ少鞍馬山次第

ちくひふ遠く・隔たりく・櫻井宿ふ夜を明け・朝霧乃晴間よ
里雲間ア高き聳め教も・昔元弘ノ初の歲・後醍醐天皇乃
東宮ふ依・楠復門兵衛正成乃城廓を構大里・葛城や金
剛山乃峯續キ・千早乃獄を見ゆてし・出や本朝ふ武勇
乃譽世の耳を轟かし・人言一と云とモ・楠正成也と乃
大將也船く・行儀亦と内如キ子孫もあらず・我今
奉公乃勤モ・楠乃舊蹟を一覽せしやと思ひ・是より
河内國ヲ起シ・楠乃舊蹟を一覽せしやと思ひ・是より
路を替・葛葉乃渡を打渡し・安野飯盛鷺の尾や・平岡過
大和川・葛井寺ふ立寄る・延平二年八月十六日楠帶刀正
行精兵も千余騎を以て・細川陸奥守顯氏乃二千餘

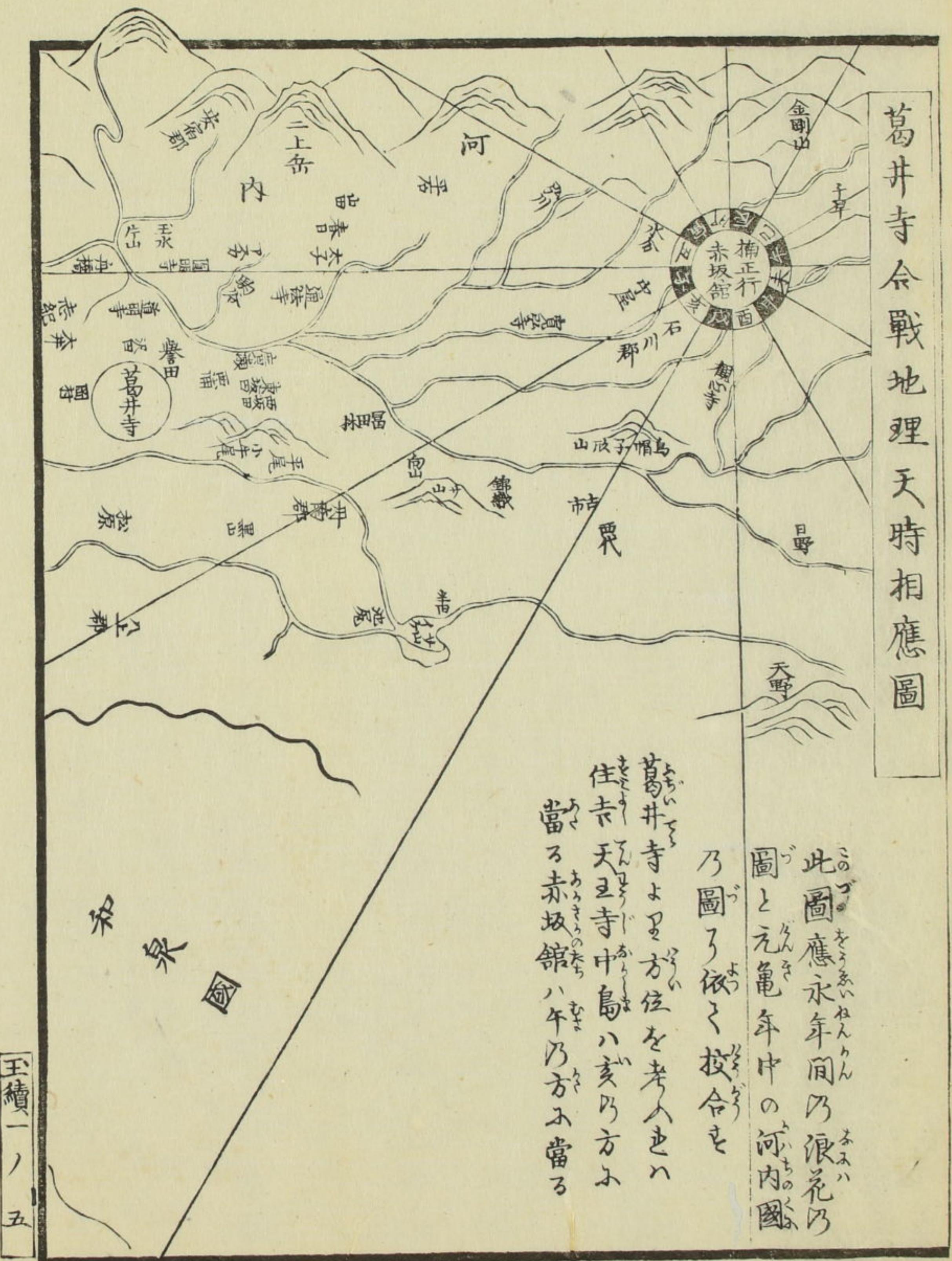
騎を責被里たる舊蹟を巡覽志く。蓋み乃所謂天時は地理了如と地理も人和了如と云との誤也。若とを氣里とかや葛井寺舊記。大承二年山本勘介云。と云名三勘介乃子孫あると云。大承ニ年ハ晴春二十歳の時。山本勘介晴春五戰書に訣み。寡戰と云は小勢を以て大勢を擊を云。捕凶行葛井寺合戦乃如是於里。此合戦。平二年八月十六日乃事。於是。細川陸奥守顯氏。八月十四日午刻。ふ葛井寺ふ着。大里。此時破軍。己方不當。住吉天王寺。中島邊。葛井寺より亥方。大當主。捕多孤を背ふ。虛を討。乃天時を得。大里と云。河内。と見也。今は詳ふ。さとまつ。延平二年八月成。

卿討死ありけふ。延元元年より十二年八月。正行。廿五歳。乃歿を迎。明年八月。父十三年。乃祥忌。家里供佛。施僧。乃作善心。如くせんす。一人。家里と。京勢。駆向ひ。敵を亡く。主上。乃宸襟を休く。亡父乃幽魂を慰め。もやしく。其勢。百餘騎を率。住吉天王寺邊へ。寺出。中島の至。象。燒拂人。京勢。掛馬。待掛。大行。正行。八岸城。河内。郡。赤坂。家定。今。將軍。尊氏。庫。住吉天王寺。中島。乃が。下。圓。せ。將軍。尊氏。是を聞。急。馳向く。退。派。せよ。細川。陸奥。守。顯氏。を。大將。う。宇都宮。二。何。入道。佐木。六角。判官。大衛門尉。松田次郎。大衛門尉。赤松信儀。守範。資。同舍弟。筑前守範貞。村因。李良勝。坂西。坂東。菅家。一族。共。都。



葛井寺合戰地理天時相應圖

此圖應永年間乃浪花乃
圖と元龜年中の河内圖
乃圖乃依く校合を
内井寺より方位を考へ
天王寺中島ハ亥乃方ふ
當る赤坂館ハ午乃方ふ當る



合三子餘騎・河内國へ差しとせ候。戊午八月十四日午刻
ふ葛井寺ふ越蕃たまけふ。比陣より楠より館へは七里
を隔たまは急々と寄ると由明日より明後日より間らず
そ寄んとらんと。京勧油断一と或も物具を解く休息
し。或も馬鞍を下りて休ふ所。舉田八幡宮乃後あふ
山陰了菊水乃旗一派。乃見く。混甲乃兵。七百餘騎
聞ぐと馬を歩せく。寄たう。ともや敵乃寄大ふや馬
ふ鞍をけ。物具せよとひー先き色めく。前へ正行。ま先
日進く。喚て懸入。大將細川陸奥守顯氏鑑をは肩。又掛
たれと。未上帶をゆ失免得。太刀を帶へキ陳。無
見ぬけふ。間村田乃一族六騎。小具足計里ふく。誰が馬

と少形く。混と打參く。雲霞乃如く。群と打たふ敵乃
中へ懸入。火を散らす。戰人たる。然と少續く。味方
あをきば。大勢乃中。取翁ら。村田乃一族六騎。一
所ふく討と。其間。大將の物具。呪め。馬と寺乘
き相従。人兵百餘騎。暫く支く。戰ひて。捕も。小勢る。里
京方も大勢あり。摺合乃軍。負へて。捕も。がやませる。ふ
諸國乃駿武者。前ふ支く。戰へば。後ふは。捨鞭打く。引け
家間。擣いよく。勝乃里追擣。もは。大將ゆ。天王寺。渡
邊乃多。ふく。殆く。危く。見へり。か。六角判官兄弟。逃げ
令きく。討死と。赴茅ふ。支らむ。捕り。まく。追き。けむ。へ
顯氏。由士卒。山尾命。を助う。つぐ。もし。京へ逃逸。只と

左軍記アシカニシキアリ見ヘたら。晴幸セイコウ乃五戰書ゴセンブス依ハ。櫛氏マツシキ乃陣ハ
住吉天王寺・中島邊と聞エ。太平記タヒキア就く考へ走は。楠
氏赤坂より打出アヒテ。葛田山乃後より葛井寺を齋セイハ細
川顯氏天王寺を經て渡邊橋を京へ逃上ミサツボふと知候シテ。
破軍乃操様トヨトモ事林廣記トヨトモア甲子日より癸酉日ミツメノヒミ十日
乃潔ハヌハ成亥ハヌハより辰己ミツミア向人庵カムラ。甲戌ハヌハ日より癸未ミツミ日
ミ十日乃潔ハヌハ申酉より寅卯ミツメア向人庵カムラ。甲申日より
癸巳日より十日乃潔ハヌハ午未より又旦カウタア向人庵カムラ。甲午
日より癸卯ミツメ日より十日乃潔ハヌハ辰己ミツミより成亥ハヌハア向人カムラヘレ
甲辰日より癸丑ミツメ日より十日乃潔ハヌハ辰寅ミツメより申酉ミツメア向
ふ庵カムラ。甲寅日より癸亥ミツメ日より十日乃潔ハヌハ子丑ミツメより午年

未小向人庵カムラ。と見也。弘正カウジは正平二年八月十六日より
長曆カウカイを以て推ス丙戌日より即甲申より革第二日カウタ崩
る。午未より又旦カウタア向人庵カムラ於里・赤坂館より葛井寺
より三方舟當カウタ。即孤カウタ坐あく。虚カウタア向人カムラと云ヘ。五戰書
小八月十四日午刻破軍己方小當ると云ヘ。北斗七星の
第七破軍星ハジハジ一木標カク者と云。孔子元辰經カウジンア天開星カウケイと云。
指カウと云。乃指カウやくを云。其旋轉様カウタツヨウも安家カウカ乃青標紙カウ
時カウに除カウ月カウ乃數カウと云。八月カウ午刻あせば。午カウ未カウ
二申カウ乙酉カウ日カウと云。除カウ成カウ月カウ亥カウニカウ月カウ五カウ日カウ寅カウ月カウ卯カウ夜カウ七カウ
己カウ内カウと旋カウを云。但孤虛カウタと云。史記龜策傳カウジンア日辰全カウ
らカウと。故カウ孤虛カウタありと云。是亦カウ日カウとは甲乙丙丁乃カウ十

幹を云々辰とは子丑寅卯乃十二枝を以十幹十二枝を
配合する。甲子・乙丑・丙寅・丁卯・戊辰・己巳・庚午・辛未・壬申
癸酉と旋り成亥乃二枝了幹ある。依て孤と云。成亥の
衝も艮也。あり。依て虛と云とあり。甲戌申酉を孤と。
甲戌申酉を孤と。午未を孤と。又丑を虛と。甲戌申酉を孤と。
甲戌申酉を孤と。未乃旋了。寅卯を孤と。午未を孤と。又丑を虛と。
寅卯を孤と。故に干支一。故に空亡と云。古とは無あり
義。又支孤ふ。故に干支一。故に空亡と云。古とは無あり
矣。干無う故あり。衝人。空全く虚し。故に空と云とあひて
孤虚と空亡と同様とへ論あり。是を兵機了闇ひ」と
ハ伍子胥も遜甲孤虚記。遜甲孤虚注。斗中孤虚圖。黃帝
兵法孤虚推記。葛洪兵法孤虛。丹時秘要法。あと經藉志

ふ見そくふふく知る。皇朝みくも吉備公乃。孤虚毎
月圖大に毛衡乃孤虚月時法もと著述ありと云とも
星を今戰ふ用ひらき一とを聞き。保元元年後白河院
と崇徳院乃御園争も七月十一日寅乃郊あり。破軍ハ子
乃方ふ向ふ。後白河院乃御所東ニ條殿より崇徳院乃
御所白河乃北殿も郊乃方ふ當せり。己乃時を待きか
ハ破軍郊乃方ふ向ふへ。恐るア寅乃刻ハ軍を向ら
キトス。孤虛を用ひぬを証と云へ。治承四年九月十
七日。前安兵衛佐賴朝卿。ム木判官兼隆を誅するア寅
刻と定めらむ。と承里。八月十七日寅郊刻ハ破軍
知刻と定めらむ。と承里。八月十七日寅郊刻ハ破軍
丑寅乃方ふ向へ。賴朝卿乃北案乃館より。山本乃館

壬午寅ノ當れ里・是義原邦道と佐伯昌助と兩人ノ一
勘進せ一處と云々要孤虛ノ依一あふ庵一同一月廿二
日寅刻夜橋ムニ陣せら西一ル亦孤虛ノ時を用ひ敷
八月寅刻スハ破軍丑ノ向人北先セハ皇朝スく孤虛
新ヨリ足橋山ノ丑ニ當セテ皇朝卿を軍務ヲ推准せ一ト賴朝卿ス中興一楠氏ヲ修補し
晴章ヲ大威セ一ト知庵一

晴章既子葛井寺乃古戰場を見ニ楠氏ノ軍法・吉備ス及
ヒ大江邑衡・義原邦通佐伯昌助等ノ傳ス生ニ遠くハ異
朝乃將帥ノ胸蘊ス發一逝くハ奕世乃先賢授受を重く
せ一太とを嗟歎一猶楠氏乃舊蹟を巡覽せんう為ニ暫
安ふ寓宿を借んニモ寺僧ス計る・寺僧シ亦晴章ヲ形容

醜一と云共・詞理約やうス・辨舌明らりのあふを奇としく
寺中ス・止宿セ一セ・且楠氏乃故を語里其遺セフ兵器を
出一く示キ・晴章あくアリ於ク・團扇・采牌・鞭・扇ス・母衣・旌
幕・内幕・持楯・押右鼓・螺貝・等乃故實を知一とを得た事とそ
旌旗作法八箇条

書記・齋明天皇四年蝦夷停代
井寺寫得之畢ム奉神助晴章トあり

即ニ十一スニ・旗乃圖

嚴の時也

高旗

日 家紋

長七尺

先旗ハ五尺

或ヘ一丈二寸

云々

昔ノ旗を吹流もう里アリ信充云爰ノ高旗ト云はシ本
郡大領沙尼具那ノ鯨旗二十頭を賜人トある鯨旗本
聖!釋日本紀ス旗乃頭・鯨ノ如!故名付・今現在と見
セ・今トハト部懷賢乃・釋日本紀作更一時を云ふ石ハ
懷賢ノ後嵯峨後深草兩朝乃人ト云ヘ其頃も猶鯨旗

と
今少・大少と呼る國あるふく知へ・但軍器考スハ
旗乃制詳不知難一とあり・今ハ晴章乃書ス依ク・千百
八十六年前ノ罷を知トを得大主・又按ス阿礼幡ト云
旗内裏式ス見セ・此高令乃旗多三幅或多二幅宋二幅
旗素帛二幅・長一丈二尺と東鑑不見名體源抄ス未
貢朝及乃記了旗多繡布人乃好之家乃先規ス依ヘキ
又長ハ八尺或ハ一丈・又ハ一丈餘神乃御各思ムムヒ
船と云・又ハ五丈乃御實を一尺ニ寸切く笠任ト有
志其餘を旗子表ヘ・縫夫く一丈二尺ありと小見セ
旌旗作法文籍けきハ是を累也・大永二
年晴章葛井寺僧を郷導と・石川郡金剛山轉法輪寺
晴章葛井寺僧を郷導と・石川郡金剛山轉法輪寺
上乘院ハ昇里・平早城趾を巡覽志・城取ス六乃地形有
古トを伝・此地を繁昌地乃本草と思定一と云
葛井寺ハ

丹南郡・紫雲山・寶院・真言宗・聖武天皇・御頭
行基菩薩開廟・阿保親王・勝興・金剛・金峯兩山乃
所心・葛城
山乃西門シト云
山本道鬼城・取巻・云城を取スは・六乃品あり・第一・
國守乃・展城・第二・云一郡或も本郡計領知・左教士・大將
乃居城・第三・小番木乃城・第四・小柴城・第五・小付城・第六
小陣城・あり・第一・了大身・小身共・小展城・了ノ繁昌乃地
を所要・小用・也無・其繁昌乃地と云・北高・南低・
南北へ長く・東・南・西・流水あり・と・海あり・と
あり・と・小堅固・大・古地・あり・武教全書・乃・說金
内國・千早城・も・捕正・威・繩綱・ふ・く・國見・小根・固・若
山猪路・山赤坂・五乃枝城・を築・藩屏・あせ・と・云・

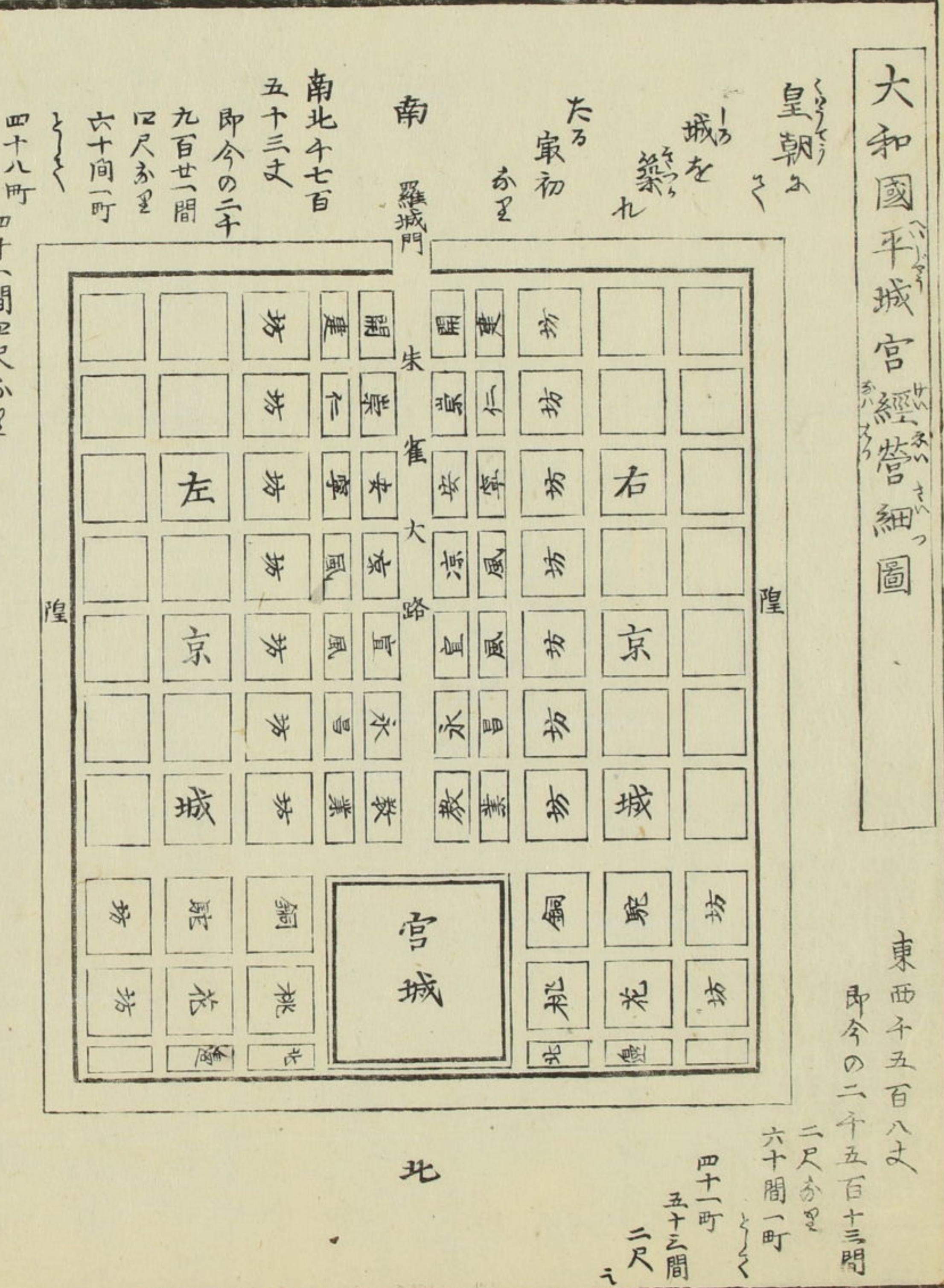


信充云皇朝ふく城を築けふと。延仁天皇五年上毛野
君乃遠祖八綱田小命ニ狹穂度王を撃てひけふ。狹
穂度王・稻を積き城不倒る。其壁立と破かへり。是を
稻城と云。日本書紀に見ゆ。又雄略天皇十四年
根使主を斬せみもんとせ。又根使主逃匿。又根子至
里稻城を造り待戦。一と云。延仁天皇五年より。百九
唐書曰。卒傳。小國。城郭。か。本を聯く。柵藩とあひと
峻。天皇二年。物部守屋大連。筑河家。稻城を築き。戰ふ
と云。雄略天皇十四年より。是後。无所谓城。乃原始。亦里
百二十年。乃ち。延仁天皇五年より。百九十五年後。又崇
峻。天皇二年。物部守屋大連。筑河家。稻城を築き。戰ふ
と云。雄略天皇十四年より。是後。无所谓城。乃原始。亦里
唐書曰。卒傳。小國。城郭。か。本を聯く。柵藩とあひと
亦里。然きは城をキと訓るや。柵乃謂と云歟。築と云
作。乃義。夫。人。居。代。を。云。苗。を。植。る。所。
か。里。

官地を。軍防令。小東邊。北邊。西邊諸郡。乃人居。山
代と云。之如。一軍防令。小東邊。北邊。西邊諸郡。乃人居。山
皆。城堡。乃内。了。於。安置。せよ。と云。ふく考へ。文武天
皇。乃平城。唐。乃大興。柵。乃經營。を。寧。や。時也。と。も。其
損益。乃。地。乃。大小。小。倅。取。捨。お。か。ら。と。大。罪。基。肆
勸。智。乃。之。城。を。築。改。せ。一。高。安。城。を。修。理。一。越。後。國。石
船。柵。太。阜。府。乃。之。野。稻。積。二。城。等。續。日本。紀。不。見。名。大。走
と。少。大。小。廣。徒。乃。制。度。王。知。へ。う。久。但。此。城。を。築。ら。事
兵。士。城。鎮。兵。と。云。鎮。兵。乃。糧。料。年。分。不。一。人。稻。百。之。十一
東。六。把。走。給。下。百。之。千。一。東。六。把。不。米。六。石。立。斗。八。升。有
走。之。今。乃。九。石。一。斗。四。升。六合。二。勺。余。是。成。百。六。十
日。不。除。ハ。一。日。今。升。乃。二。升。五。合。口。白。余。小。當。是。是。鎮
兵。一。人の。由。類。聚。國。史。八。十。四。大。同。五。年。乃。象。不。見。不。是。
柵。柵。亦。里。

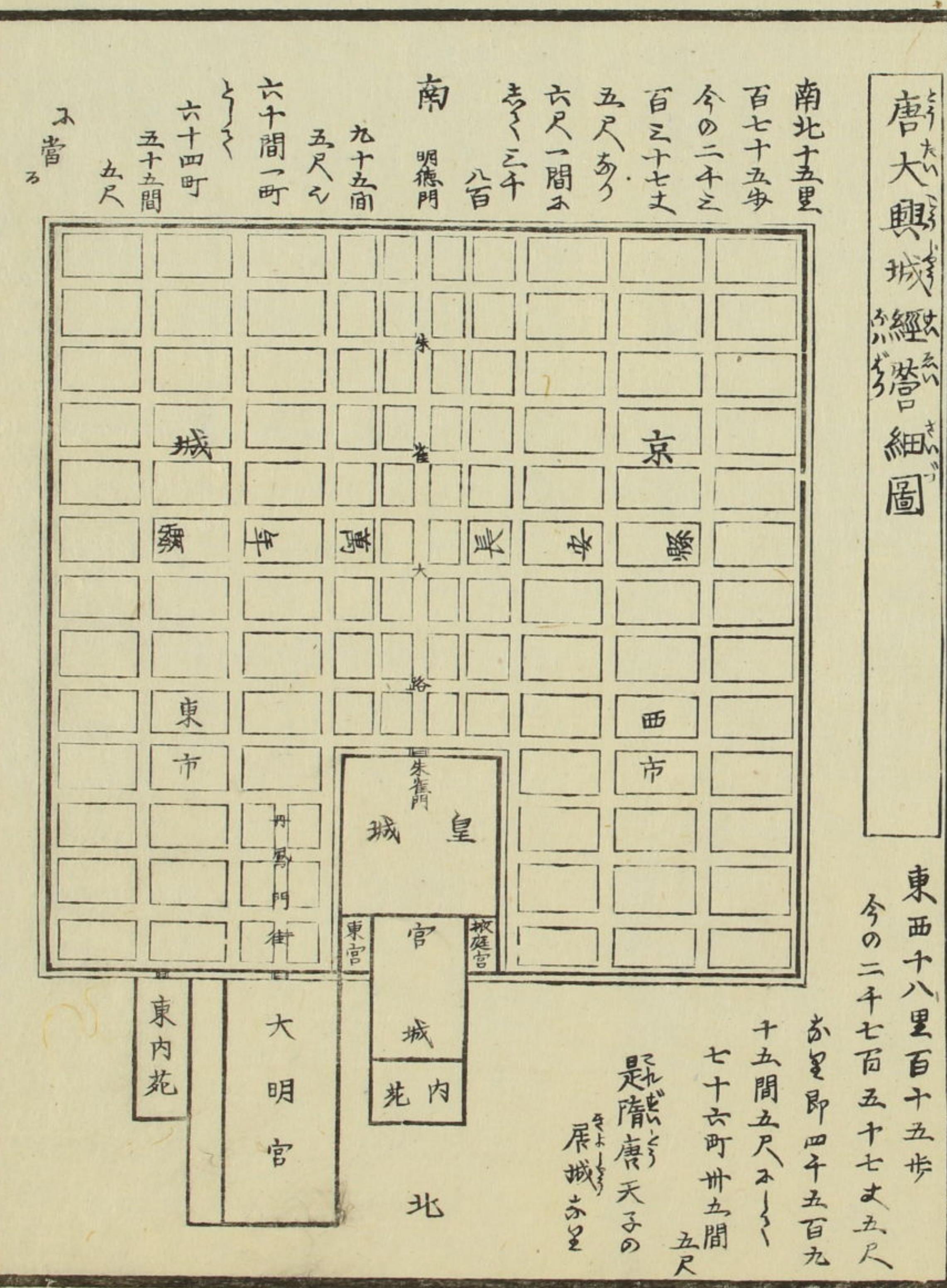
大和國平城宮經營細圖

東西千五百八丈



唐大興城經營細圖

東西十八里百十五步
今の二千七百五十七丈五尺



を春来ふく渡ととくも日糧一升六合を給ふと三代
實錄元慶五年二月乃案ふ見えたる。今量二升二合有
大將頼朝御乃定ハ五升を給ふは東船ふ見ゆ。今量四
餘弓當弓一歲ふ十六不九斗余あ里平將門乃島廣
今世弓同心乃禄乃起る所と知へし。升八合
城ハ城門を三重弓構へ三百餘所弓櫓を揚總堀も廣
深さニ丈餘弓堀切を切岸も屏籠を立たる。かく弓
八九寸をつゝ乃翠色乃甲を鑄貫く。あくべの屏を塗
たると云。下総國相馬藤原純友乃高繩城ふ少櫓・櫓楯
を造りと云。伊豫國温泉安部頼時乃衣川柵清原武
衡家衡乃金澤柵其名高く聞入家と云と。其經營乃
法を詳しう。獨楠氏乃金剛山父ふ三世五十餘年

間裏施とく南山乃約束を爰ふ守里藩屏鎮換り雄
威を示さむ。陳跡ある。晴幸乃登覽。城を發
明せしも理ありや
光陰箭乃如く晴幸乃内に留むと既ふ六年楠家の舊蹟
盡く歴覽し今い葉く乃奉章あるは中國。往く功名を
立ち築をかずもとより住吉天王寺よと渡急橋を
手渡。又丈物西宮兵庫の津よと船ふ乗安芸國佐西郡嚴
島ふ參詣。棚守乃某を主と毛利家。仕えんことを
謀る。大永七年の秋と云晴
棚守。大永二十八歳の時す
棚守ハ嚴島社家供僧内侍社役人職乃上首。一負ある
舞方を兼司。往々後下み叙。本姓ハ佐助。尤物ある

苗字を姓飯と呼けか。何時久嘗よど。其職名を棚
ひく棚守と称す。大承の頃も棚守房號り時ふ當れ。是
永祿七年三月七日嚴島大願寺圓海上人建立棚守房
顯寔人棚守親尊と云列名嚴島名所圖會不あるふ
考ふへ

此時毛利元就行年三十一年嚴島社參乃次棚守の家ふ
於く初く晴幸に見ゆ。其容貌をもとまく東北を尋覓
其志趣を推問。暫く沉吟。而くぬ城ありけふ。又七日
乃後使者を來らしめ棚守ふ告ぐ。先日一見せ。一所
の京都浪人ちやくげ地を去りむへ。久爰國中ふ經歴
せし先されとがく棚守其意をひく。晴幸ふ圓東の後ね
乃威烈を悟る晴幸即日暇を告ぐ。主出んと以棚守を以

速あふを極む。晴幸云。某比國ふ仕官を求ん。う焉ふ。未れ
き君山ゆく。我を推舉せら。然あふ君甚ふ。圓東乃然。招
を絶ふ。君々意既ふ替ひ。圓東へ還。南ふ。足か極ふ。へ
と續。足是某り。暇を請。所以がくと云。棚守。乃敏捷を感
賞。へ止ひ。賜か。乃元就の使者。う言ひ。ふ。を告。無ひ
晴幸厚く謝。へ。棚守氏を辭。へ。去。

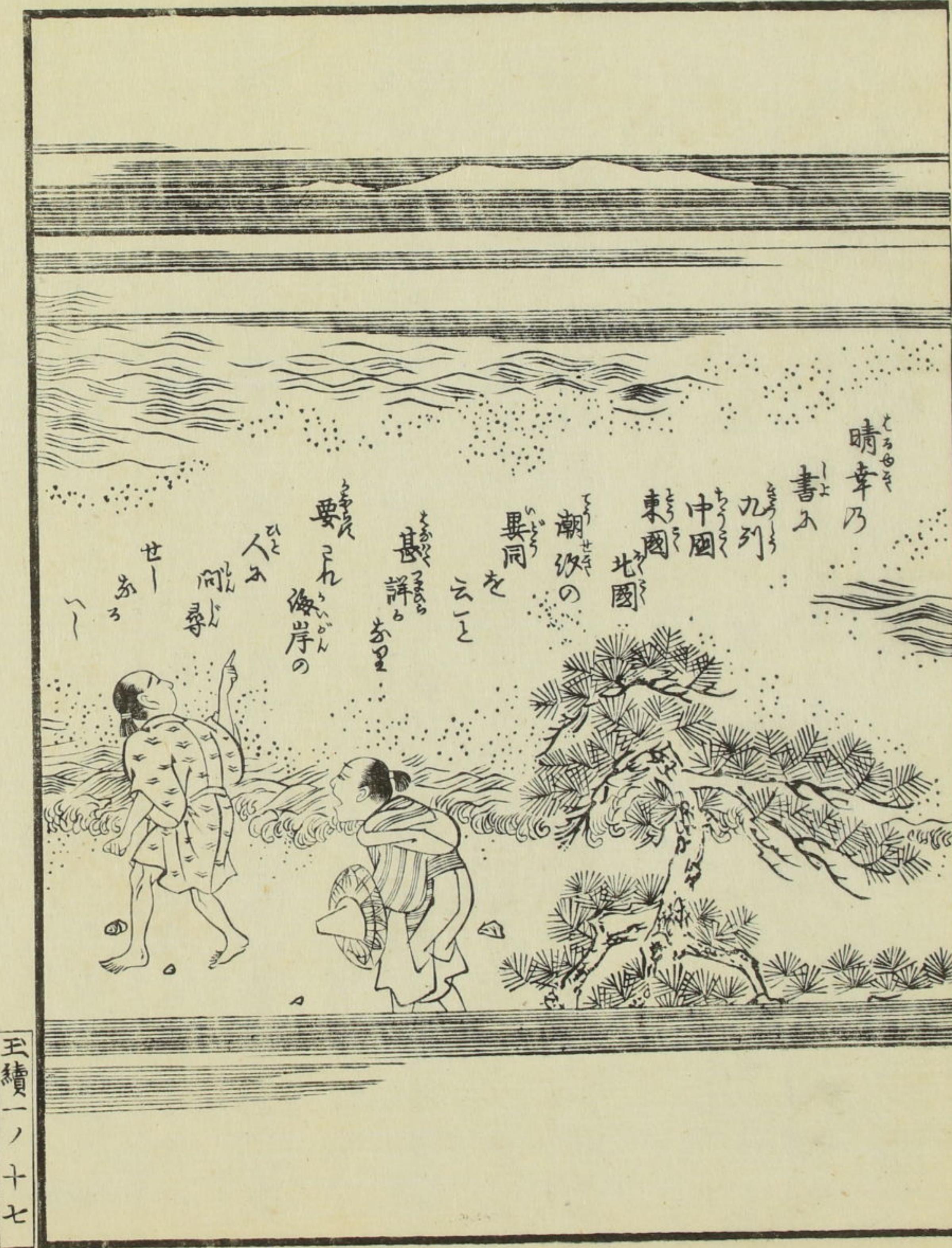
内裏修理。尼昂豐云。中少内元就も本領七百貫計。み
京都將軍家の時。百貫文ふ。米。百石を交易。さ年の
豊凶。依て損益。あ。共。七百石。内。米。を。收。む。計。の。祿
へ。八箇月。七ヶ月。あるひ。も。スケ。也。據。ふ。大内。尾。ふ
大友。二大。おと。戰。終。不勝。利。を。得。三將。内。主。を。大。吉。切。落。
今安芸の毛利とのひく。我朝。ふ。昔。の。と。ハ。多く。並。追

代々氏義貞より以後うへ件の元就か足と山本を思
ひ事ふ云ひふとあり 甲陽軍體甲陽古 晴幸ちるかくと
安彦小就を元就ふ仕んとを求て漫へ猶も元就の將
業あかてを知く是を諸君不称賛く止ひ能人の業
を顯さんと云へ一又元就の晴幸を奉る意を察し
るふ淮南子ふ史將へ必獨見獨知あり獨見とへ人乃
見きふ處を見獨知とへ人乃知きふ處を承と云り承
一心中乃機意外の密をふりく味く人魚一

山本勘助物語云安彦の元就敵國をすゝ隨へ千貫二
千貫を先方元を抱らむと云其普代の八千貫供
貫云士を轄く上をへあけ覺あふ普代入ハ考方の

忠功ふさ國を伐治みひ名号ふと改名行を新美乃我
寺式子澤山以下古氣元御腹立と御道理又萬と云又
覺ふかく甲斐がそん人をも普代元をせは敬ひあ乃損
あふ人ゆえ就と云名將を頼む於系人を執りらるく
是非我等も忠節を絶じて來治ふ國の先方元もあら
允ら共へきと覺悟りてよつて元就乃威光次第ふ
増ると承及ふ新美乃普代を侵む傍輩を漫るふ非を
大將を輕んじず教道理ありとあり

山本道鬼庫法書ふ備を置く操掛る作法其備動く亂
たふを討じて為な里陣替乃作法乃如之是毛利元就
尼子經久と合戦乃時ふニ史せし陣法あり信充云宋



史吳璘ごりん傳とどき小璘疊陣さわらぎじんの法ほうを立たて.其法戰人たたかひにんとス・長槍ながやりを以もつく前まへふ展おほ坐すくきく起おき立たつを得え.そ乃次そのちふ最強弓さいきょうゆうを展おほ其次そのちふ強弩きょうのうを展おほ膝ひざを跪ひざく俟まつ其次そのち了り神臂弓じんびゆうと備そなへを列はしらへね備そなへ賊ぞなへと相搏あさかう百步ひゃくほ乃内うち至いたる時ときより神臂弓じんびゆうより發はつ七十步しちゅうほ乃及およ入いり時ときより強弓きょうゆう強弩きょうのうを並ながひ放はなち其次そのちふ拒馬きょばふく鐵鉤てつくわを連つづねて戰たたかひ其傷きずを俟まつ是これを更代ごへだい鼓つづけを改かく節せつとかく其間そのあいふ騎き兩旁りょうぱうを讓よく前まへを敵てき退しりぞく是これと費う陣ぢん乃法ほうと云いふとあり然しからハ元就もとすけ乃ちそち之の陣ぢんもより吳璘ごりん法ほう了り依よく發明はつめいせせ一いつあるふや

嚴島いつきしまを發はつし周防國すわぎく吉敷郡よしきのべぐん山口やまぐちに至いたり大内だいない從つ二位にい義興ぎこう卿きよふ仕つかひえんえんとを求もとけあある.義興卿ぎこうきよ去さる大永だいえい六年二月

石見國いはみふ發向はなむけあく.尼あまふ經よ久ひさう旗下げき内うち城じゆうを立たて六箇所ろくかしょ進すすく那賀郡なかぐん三隅城さんすみじゆを圍いざなミ.七月より十二月了あは役わくふ三隅縣さんすみけん隆入道りゆうにゆう糧盡りょうじん十二月八日降おち人ひと年出で尼あまふ經よ久ひさりくとは知しと出雲いずも伯老はくろう備後びへ美作みまさか數萬騎ばくまいきを帥さして富田とみだ發はつし.出雲國いずも食不郡くふ赤穴あかあなふ陣じゆつけふ順じゆ三隅落城さんすみらくじゆ乃生残おきののこ闖くわ進すすく那賀郡なかぐん濱はま回まわ至いた里さと三隅さんすみと五十餘町ごじゆちゆうを隔はなく對陣たいじんせ里さと合戰あつたんを數う五十餘日ごじゆじゆ了あは時とき山名やまな右衛門督政ゆゑもんとくせい豈ひ伯老はくろう國くにへ引出ひきだしニ尼あま乃方の城じゆを嚴ひそひと聞きえけ色いろは經よ久ひさより使者ししゃを立たて軍ぐんを旋ひらく大永だいえい七年二月出雲國いずもへ引退ひりたいやくゆく後のち不列ふれ大うだい大内だいない家け乃旗鼓はたぢふ後のちひけふふ義ぎ興ぎこう卿きよ脚勞きやくろう所ところあつまく周防國すわぎくへ引返ひりへん一いつかとあれハ

謁者人ひあし徒ひきみ月日を過くわと内うち了り享祿元年十二月廿
日義興卿よきおき行年五十ニ歳と一薨去あり嫡男義隆卿よ
四歲よ一月周防長門豊前筑後石見安藝備後七箇國乃
鎮藩ちんばんとあると云共詩歌管絃くわんげん遊ゆ百克乃卒そくふ後か
を忘うれ六敗よ乃過くわ哀あしやく兵法調練芸學げいがくを云者
進すすむる器きあくあく大内おおうち老お兵ひ陶とう兵庫頭持めぐら長入道道麒麟りん
孟貴もんき小智こちハ子房こぶ小劣おと侍し大將だいじょうあきとあ自立
内うち心こころあ里あり國くにを憂う人ひとふ慮おもあきとあ晴はる幸さちふに乃亂おと遠とお
ららとと思おもひ計か里あり此こ地ぢを去はな長門國ながとくに豊東郡とよとうぐん赤間關あかまかん小到おと
便べん船ふね九く列れつ内地うち卦くわ

山本勘助物語さんもんかんすうものがたり云西國せいこく小大内おおうち之の後ご義隆よ和朝わ三人

とかた大名だいめいふぞ居城すこひじゆも周防すわ乃のと中なか所ところあらあ國くにも不及およ西國せいこくも殘のこららと在あふに仕つかたふせ承うけりり然ぜん
ハ近ちか代しろ乃の大内おおうち致たま生う出でより里さと乃の大名だいめい諸よ勢ぜいととあくあ孫まご
更さら物ものをよう書か内うち典てん外ほか典てん昧まいから以よ次つぎを詠よ詩しを作つく行ゆ
儀ぎ正ただく志しくよよ下しもを常つねふ着き相あよよ望むねまくまく膝ひざ小緩くつろけ
ああか作つく法ほう小定さだしし何なん事こと小皆みな也よ對たい一善いっしん事こと過くわ惡あく
罷まつ成なりト見みくく里さと信充しんじゆ云是これ享祿こうろく乃の初はじ義隆卿よ嚴鎮ごんと
ああつつ頃ごろ晴はる幸さち乃の現あらわ見みか周防すわ乃の風俗ふうぞくと知しへ
爰ゑふよ下しもと云い直ただ無む乃の事ことかか成な民みん年と中なか行事ぎょう光源院
御ご元服もとぶつ記き乃の見み御ご元服もとぶつ記き乃の大だいユユ魯ろ鳥帽とりば子こよ下しもを
上じょう下しもあらぬぬを晴はる幸さち乃の言ことを熟じ思おもを教う當時そのとき乃の武ぶ士し年と知しへへ形ぎょう里さと

日・上下を繕せりと聞けり肩衣襷を日々乃

服とせしと云々

豊後國より大友・大馬頭・義鑑・累代・鎮撫の威を逞くと新國
と云と少・近年へ大内家乃下風うる廢き徳くひに内國俗
ふ縁ふ國あきは別ふ施をへき術もあく・去は關東ふ立
越んと復船よ打乘ハ重内瀬路う帆を揚ぐ備前國鬼島
郡下津井乃浦より陸ふより・み陰内諸國を游歴す丹波
國乃波多野内氣う家ふ密とく度よりふせり合ふを
をく大手門也と少心う叶入仕合ひあく・義継路を経て
北國を過・出羽國山本郡金澤乃城蹟うより・後二年乃辛
苦を感じ・爰ふ七日七夜を過ぎけることや

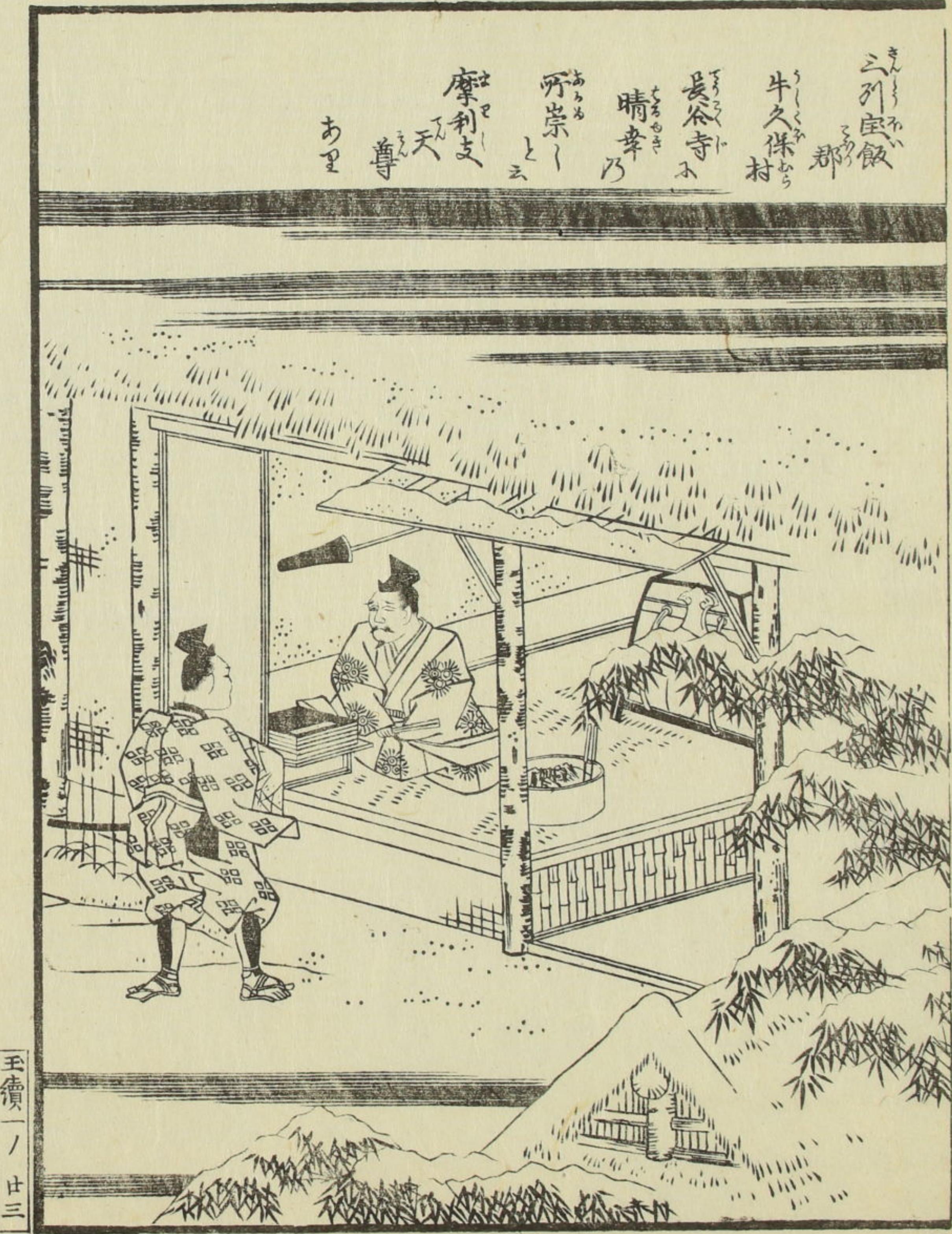
山本勘助物語ふ云伊豫守賴義朝長乃九年乃合戰八
幡兵即義家朝長乃三年乃軍も其身其國乃守とく
其部内不服乃者を征伐せしと里善夫乃下王長小非
と云と少一然ふ九年二年乃久一を經たふも武威
乃薄き不似へ事と少實へ無らば王威猶盛あふるを承す
將軍乃權勢輕く一と賞罰を專ふを教ふを得て是は
形里右大將賴朝御もくを知りては平家追討乃
宣旨到來あむけ承時了軍乃習入賞罰も大將乃司承
處あ里進退と少ア御任あふへきよ申傳せ玉ひたうし
小依義仲追討平家退治六年ふく全く天下を絶ふへ里
賴朝と賴義義家乃優劣あふるあくは王威武威と少

一致せり。故あり。信充云。金澤乃柵も清東武衡家衡乃
籠里く義家朝後と三年。際合戦ありけふ舊蹟。あり
是を後二年。乃軍と云。此軍を龜暉守。惟久畫。ひき土
將保脩世尊寺。御門文殿。寧人仲直持明院。光明
文。ハ貞和二年。法印。權大僧都。惠。ふく。崇書。尊圓。御
親。お里。諸。ハ天保十四年より。妣。軍を繪。書。河。小
口百九十七年前の書と知。へ。妣。軍を繪。書。河。小
後醍醐天皇。南。巡狩。乃後大將を立。ら。彰。一と。其器。不
當。ら。少。から。故。子。征伐途を失ひ。勇將猛士。功を立。新。と
を。得。さ。み。を。諷諫。せん。り。たり。不作。也。か。形。也。と。も。但。其繪
乃精妙。を。賞。た。る。人。乃。ミ。多。の。里。一。晴。幸。地。ア。至。く
此歎。を。あ。き。其。軍。機。ア。於。ミ。意。を。盡。せ。里。と。云。へ
金澤。乃。柵。を。出。く。秋田郡白澤より。破。國。を。越。く。陸奥國。乃

津輕。ア。入。く。岩城。み。を。諒。め。南部。般若平。の。境。よ。里。鎮守府。乃
蹟。を。過。衣川。を。渡。里。く。鎮守府。將軍。秀衡。乃。中尊寺。光堂。を
巡禮。此國。ア。住。ち。や。と。思。法。る。ふ。伊達。左京。太。丈。植。家。と。嫡。子
晴。宗。と。父。子。承。相。し。く。國。山。穂。高。ア。ら。ん。停。る。面。を。便。ゆ。無
き。は。向。川。の。圓。を。へ。く。下。野。國。那。須。野。を。立。大。膳。太。丈。資。房
内。許。ふ。至。り。ア。資。房。向。河。乃。結。城。白。河。乃。織。城。と。云。ハ。上
尉。給。廣。乃。左。兵。衛。佐。と。合。戰。ア。陸。奥。方。よ。里。東。名。浪。人。を
嫌。い。お。り。は。足。を。留。る。術。あ。く。常。陸。國。乃。佐。竹。大。膳。太。丈。義。篤。
那。小。卦。什。ハ。左。少。將。義。舜。朝。後。さ。く。る。卒。ハ。大。膳。太。丈。義。篤。
家。を。嚴。と。云。と。少。齡。僅。ふ。廿。二。三。歳。ア。萬。老。長。乃。沙。佐。亦

也ハ晴幸仕進乃路あく。伐竹を立テ。真壁郡下妻ふ至里
多賀谷修理大丈政經（よさ子）下妻四郎。號幹也。氣氏乃一類を里
跡（あひだ）了小山朝政（あらわし）不。長朝（あらとき）を居レ。其後多賀谷三郎老義
を以テ下妻乃城主と。老義六代乃孫重政（よしまこと）。政經也。即老義
を以テ吉河乃御所。仕んとを請ナキ。此時左馬頭
政氏朝辰（さだちあそん）成氏朝辰（さだちあそん）と左兵衛督高基朝辰（たかきあそん）と御中睦（むちく）ららひ
す。ませは新參乃便（たう）を失ひ。傍らば上松家乃仕官せんや。と
上野國綠野郡平井了卦（ひらゐ）をけかア。憲政家督乃初といひ
年漸々六歳。憲政（のりまさ）ハ大永（おほなが）四年。赤色は内外乃政務家老の
大石（おおいし）武藏國七黨（しちとう）の副黨小川太郎。榮政（さかひろ）乃長男。弘真を
道（みち）藏二宮城了住（さとす）。源左衛門尉ハ小情（おじょう）七黨の兒玉
隣國戸食城。よくハ滝山城（たきやまじょう）。展足と云。尾高乃長子。小幡
行高（ゆきたか）乃長子。小幡長尾（おさね）。上野國白井館林總社。二家の
平左衛門行賴（ゆきのり）後。あり。長尾（おさね）尾あり。また越後乃長尾あり。

白倉（しらくら）秋父平武者行弘内五男。あと五子。威（い）を争ひ。面々乃
居城。引籠（ひらふ）。平井ふも去庵（まわん）。侍山居合。晴幸（ひるやす）いくそ
上枝乃減（へぢのへぢ）。遠くそひと思ひけ。は更（さら）旅装。もく。小国原
を過ぐ。小條家乃制度を覗。ひ翁根を越。駿河國ふ至。は。安
ふ當國府中乃今川義元朝辰（よしもとあそん）。今川に即國民六代乃孫
上総介範政朝辰（ひこまよ）。曾孫治部太輔氏親朝辰（よしもとあそん）乃之男ふ
族と。海道弟（あひだ）。乃曾長（むかひのちやう）。妣家（ひのいえ）。仕立。年來乃本意
を遂。も底と推奨の縁を求と云と。然る趣旨知己。も無
終。ふ行（ゆき）と。もあ。參河國寶飯郡牛窪（うわい）。至る。時。ふ牛窪
内地頭牛窪弦六郎と云者あり。其身。も。方。或限。乃者ふも



三列屋飯郡
牛久保村
長谷寺
晴幸乃
所崇一
摩利支天尊
あ里

あらゆとひ頗人を知り量ありけりは晴幸の志を憐れ之
おきを扶持しりう牛久保の東海道御宿より北東へ入
今田敏とおお牛久保氏へ今川義元戦死の後岡崎へ出仕を先あす晴幸諸國を遍歴
て古城跡を圖古戰場と覽く勝敗の機を察知し人數
積兵糧割不精くは甲斐信濃乃國へ送り聞えたりは
郡内に小山田備中守おきを武田勝子代たる語る勝子代丸
心中大喜ひ小山田を以て具く竊て晴幸の家を訪り
走り行軍治城乃軍機を語らひさう主従乃約をかゝ是
より衣食を餵く謀主とあく實ふ天文三年十二月ふく
勝子代九十四歳晴幸に十二歳乃時あり

甲斐國山梨郡躑躅峰乃城令古府中と云或田刑部太
輔信綱朝長始く衣和服餵を

移築て安不居一より信虎晴信よ里信濃國伊豆郡銀谷
勝賴と四代相續伝せし於是を過參河國設樂郡板塙乃山村掛里新城本野原を
經て平窪ふ至る班路凡て十里餘れ里屋根嶮峻半
馬を通せぬ敷地もあ里勝子代九十四歳乃幼稚殊
軍身輕裝入内韓勧了依ふあくは昔蜀の昭烈皇帝劉
諸葛亮を蜀中ふ二顧せしと事相傳へとし昭烈皇帝
四十七歳諸葛亮廿七歳乃時漢の建安十二年亦里時
無事乃時よ軍師を求えらむ了はれど也へ其差行を霄
壤乃てあらんや

晴幸武田龙京太史信虎朝日明應三年甲寅誕生天皇雄暴
文二年八月十一歳

居乃性。うへりとふ安田。武田。太郎信義。義定。孫。成。逸見。武田。太郎信義。孫。某。孫。岩手。武田。信昌。岩手。七郎。孫。葛尾。一族を攻滅。其所領を奪ひ。加賀美に即を信。葛尾。小殿里。櫻井。兵部少輔を追捕し。皆其地を合せ。孕婦。内腹を剝。馬場伊豆守虎貞。山縣何内。守虎清。忠謙を怒。く星を平刃。信濃國岩村田。内守虎豊。理を盡し。誠を歟。其過を歎んと。其をば。己を訓誨と云ふ。星を斬害し。個威武を張り。強勢を逞しくせんと為み。國民安堵せ。以將士薄氷を踏み思をあひ。勝。子世の智慮。頼。母の。處。

あるを廢す。庶子を寵愛せらるゝと。法。了。退て。かく。新羅。三郎よひ。十八代相傳。乃名家。忽。了。滅。亡。止。他事。ふ見。教。了。恩。ひ。と。一計。兼。と。此勝。子。代。内。を輔。优。も。と。思。ひ。天文。に。年。駿。何。乃。府。中。了。赴。き。庵原。安房。守。家。了。客。た。是。晴。幸。乃。武。田。家。乃。為。不。事。を謀。し。初。あ。里。今川。義。元。朝。臣。天文。四。年。多。十七。歲。赤。城。兵。庫。落。照。露。言。抄。天文。廿。年。五月。城。兵。庫。九。十。小。當。兵。形。朝。臣。十。八。歲。ふ。あ。ら。せ。五。八。一。時。天文。二。興。津。民。部。源。懸。川。三。郎。左。衛。門。尉。兩。人。了。仰。肩。ら。也。御。先。祖。乃。御。秋。并。ふ。其。御。家。乃。御。重。器。等。を。集。よ。と。乃。御。事。を。了。一。ハ。予。稀。か。新。年。五。九。ハ。と。勢。を。退。く。七。十。夕。陽。乃。傾。く。計。あ。教。形。乃。ち。ぐ。せ。と。す。八。

身片腹痛くも思大まんあくろ斯味氣かモ老乃僻耳
を漏付る般里と云ふ依ハ義元朝臣弱歎より文事ふ
心を寄みへと知無一

晴幸朝比索右兵衛大夫を以テ孫吳乃兵法城取陣取み鍛
練ノ京流乃劍術止平あふ由我今川義元朝臣へ申シ仕宦
を望と云とサ・義元朝臣年若きよア軍旅乃法多累代
乃庭訓ヲ従ク事足ヘ!何ニ事新一く異邦乃兵法を學
ヘケンヤミ乃上晴幸勢短く色黒く眼ヘムニ趁跛アリ然
ル三列牛窪乃小身ヨリ出下部へ人少召仕也教習乃者
乃如何かきハ軍旅ヲ通達せん城一川預里セシ一隊
の人數を少引廻シテ何と一城取陣取をば鍛練サズ

ミ・劍術乃神道流不増る事アラ一ノシテ賞銘乃無里
タ色は近羽脛扈徒ト輕蔑ス・隨人者凡アムモリ至
武藝小傳ハ・山幸勘助晴幸入道道鬼乃京流刀術ヲ達
セ・京流とは堀川鬼一法眼流アリト考里武田二代軍
人アリ其傳統鬼一法眼流アリト考里記行端と
宮郡二瀬村梶取社乃左半町許ニ歸一法眼乃墓アリ
九郎判官義經乃兵術乃師アリと云訓閑集を傳シハ
人アリ・源義經・鬼一・小通一・潜ノ訓閑集を傳得た時乃
里と云此書鞍馬法師祐賴ヨリ清尊明範性慶隆慶光慶
軒省通代慶義延宥道鬼と相傳セ一由云
武夷下總國香取郡飯篠村乃人・山藏守家直康島香取
乃神小祠ノ刀槍乃術精妙を渾天眞正傳神道流と號

是其流祖亦是。

信虎朝長乃暴虐日々乃增長。長子勝子代内を扶弱ありとて其位を廢廢又乃次郎丸後左馬介を立嫡子總領とせんと謀らしけふ。駿府へ聞えければ晴幸大ふ驚き父子乃間も尋常乃理。ふく年ひ難い。如何に信虎朝臣横紙破。若本性か是と申。勅復と云へ。よし不善五人也。去はより勝子代内を元服乃儀を謀る。而して晴幸竊ふよ京一丈外記康顯朝長を就く。宣旨を申。之より野中務少輔。又依。室町殿。將軍義晴。時。大納言。從三位。乃御一字を請け。不ふ累代乃名家ふとは。容易く御字を取る。易く。斟酌す。御の通と申。晴幸。又。誠。不餘義か。新號御字ふ。

愛く父の荒涼か否。粗心靜まり。是は好御方人。が承り。然らば上野中務少輔。將軍家乃御使。と。下向。改ら。即ち。後又位。下大膳大夫。補任せら。新く宣旨をば。大外記康顯朝長。あき。找調覽翁。入。是を持。上卿。右轉法輪院。衆權大納言公賴卿。あり。外記家譜。歴名土代。孫。小障。もふ。と。あり。下向。二月。下旬。不及。ひ。三月。朔日。宣旨。御使將軍乃使節を。信虎朝長。若。居城へ。迎へ。元服乃式を遂行。も。食應善美を盡し。古籠。若。新寺を以て。御使出の旅宿。と。栗原蓮西へ道。

信充。武田信義。右大將賴朝卿と。共。朝敵を討。太平手記。見ゆ。

を致せ。勲功大ある乃あらひ。六孫王八代乃嫡孫と云
を以て。賴朝卿最敬禮を盡せり。是は其子孫ふく
ル家禮。嫡孙の家ふく。庶子の家を家禮の家と云。官位
乃列不入。色い去は鎌倉九代乃將軍家の名前を授
ふ人と。矧北條一家乃一族をや。信義七代孫・陸奥
守信武朝後すく尊氏將軍乃重く崇敬せらるふひ
かは即鎌倉將軍の時乃れく一字乃沙汰了及む色い
信武朝後より信虎朝後すく八代乃際。先祖不
従く御宇をやとふいを承ふ。晴信朝後不至く。初く
將軍家禮乃列と同く。御宇をやせても。晴幸乃計
策ふ出く。父又不快を極せんと。誠意あせと。信

虎朝後乃意。備々教處あり。川らし。されども宣旨乃御
使武家乃專使。他乃比例。ふくを。面同と成ふ。あらば
晴幸。北薊。篠篠。西大衛。乃別呼。國を。奪ひ。と。民を
和と。能。如何。せ。と。不。硝。向。ノ。不。硝。の
云く。玉乃觀。あそ。孫。へ。と。謀。ふ。か。と。謀。ふ。か。と。信
異。あ。教。ふ。や。 懿。 乃。先。傳。

然る。信虎朝後。次節丸を寵愛せらる。と。次第ふ。更。く。晴
信。朝後。を。疎。ま。影。く。と。舊時。乃。傳。一。タ。影。す。より。元。ひ。伊。豆。守
信行。甘利備。前守。ふ。山。田。備。中。守。板垣。駿。何。守。信行。飯。富。兵
部。少。輔。虎昌。等。打。寄。く。評。護。あ。け。ふ。や。う。信虎朝後。い。や。う。
手。荒。き。と。乃。之。彼。茂。也。ば。國。民。暫。時。乃。安。堵。せ。ひ。馬。踢。山。縣

内氣ニ氣幕乃君傳ハ諫テ死リ。其外後々乃北軍ハ由縁を求
く他國了差シ又老々行歩乃叶セ改革・幼稚々東西知ぬ
者ともハ共ニ表人とあそ歎くあせりやくくに鄰國乃敵対す
とき誰をう催促して大事乃軍了の手を合ひへ至・然らハ武
田乃家乃淳源旦夕了逼れま忽か坐へモ時了あし急
驥河乃今川敵と相謀ス・信虎朝後を押籠矣らと晴信朝
后を家督了居んと隠キ了謀けふ由を晴信朝後不中
かは密了晴幸乃許ヘ此事如何もへと宣ヒ遣さきれど
尚書云后克了乃后たふを・難とぞきハ臣克厥后大ふ哉
難とひとかや・晴信朝後サかよ里心を軍國不勝ひ能將耶
乃氣を察シ・嶮峻乃遠路跋涉あく・良智良能を

治國安民を以テ難とぞ教ク故了老臣々て廢立乃難
を謀敷宜哉・說文了君尊あり・臣も尊あり・心常ス・君
ふ牽弓射里と云一ト・孟子云・貴戚乃娘・夫君過あせは・信
を易と云・宍山・甘利・小山・田坂・垣・飯・富・一簇あり・大
臣あり・所謂社稷乃臣・大臣・君急と云・大臣
彼ノ失意を相・君廢ると云・是・尼掃・星・更と云・然
走は信虎朝後・軍國乃務・ふ急・將帥乃機を廢を里・大
臣乃為了追也・と自取里と云ヘ
晴幸庵原朝比奈等乃諸將帥了・甲斐國乃政・散民離んと
さとふと・城諸里・星を輔・外援と為ヘ・と云・庵原いかず
ちく星を輔へ・接と云・晴幸答・接信虎朝後・性狂亂

あくまく無罪者を殺し謀臣を虜め妻を割親族を滅
せ國民怨望士卒憤懣怨と憤りと多く積みあはれ
蕭牆に近き處に起るへ若又天神武田家を愛し地獄甲
斐國人を憐り重く宿老乃將帥からし信虎朝臣を推籠
くふ息乃賢者を擇く家督と定むへ其時當屋城義元も
信虎朝臣乃譽君すよりまとは御に入らし甲斐の御殿ふ
眷弟乃公連を仕展らむあは甲斐信濃上野を乃御先と思
食へ一見戦士とて勝争ひあく取乃謀みてひと理を盡
あ道を別く申けとは例乃勘弁う烟水練理兵法よと笑者
乃多くして信を教人を説かせとぞとぞとぞとぞとぞ
當家乃幸福是不遇じと待幸を教人山中ふへ有けりとぞ

